

# 平塚での中勘助

## ～『しづかな流』の味わい方～

文芸評論家 尾島 政雄



### ■尾島 政雄 〈プロフィール〉

平塚市生まれ。湘南高校、早稲田大学卒。中央公論編集次長。開発室副室長として雑誌・書籍・全集の編集に従事。現在平塚・藤沢・厚木などで文学・歴史・文化史講座講師ならびに文学・歴史散歩講師。講演ならびに執筆に従事。藤沢市在住。

### 今も変わらぬ松籟と波音

私たちは、中勘助という作家をどこまで知っているのでしょうか。岩波文庫百選のベストスリー『銀の匙』の作者として、その感受性豊かな見方とみごとな日本文が織りなす子どもの目に映った世界に、熱狂的なファンは多いのですが、いわゆる誰もが知っている大作家というわけではありません。むしろ“味のある作家”というべきでしょう。

ところが、中勘助四十歳の明治十四年（1925）から昭和七年（1932）までの七年有余、平塚海岸に居住し、その静かな生活と自然との対話を五百ページにも及ぶ日記風随筆『しづかな流』（昭和七年・岩波書店刊）に活写したとなると、平塚および平塚市民としては見過すわけにはまいりません。

あれから八十年。平塚は大きく変貌しました。市制の実施、そして昭和二十年七月の戦災、それからの着実な発展と——時代は変わり人も変わりました。今平塚海岸を逍遙してもほとんど昔を偲ぶよすがはありません。しかし、中勘助でいえば『しづかな流』の作品は残りました。そして松籟と波音、吹き抜ける風は昔も今も変わることはありません。

八十年前の平塚海岸は一面の砂地に松林が続き、今も町名に残る（桃浜町）桃畑に点在する別荘が、ひっそりと建つ風情でした。

こうした場所は、自らを厳しく律し孤高な文筆活動をつづける中勘助にとっては、むしろ望ましい場であったはずですが。その中で勘助はさして変哲もない日々を坦々と綴ります。その意味では、五百ページにおよぶそれは、むしろ地味で全編を読み通すのは苦痛すら感じられます。しかし、何度か目を通すことによって、私たちの心には今は失われつつある往時の海岸風景がよみがえってくるのです。そして中勘助の美しい日本語が紡ぎ出す自然の美しさを垣間みることができのです。そうです、それはまさしく『しづかな流』が私たちに残してくれた平塚の文化遺産なのです。

こうしたことから、平塚市文化財団では一昨年、ふるさと文化事業の一環として「平塚文化塾」を立ちあげ、平塚にゆかりの深い“『しづかな流』に学ぶもの”に取り組み、市民レベルの視点から作品ならびに作者の実像に迫ることをはじめました。その成果は昨年三月に発表の『しづかな流～中勘助に学ぶもの～』にまとめられました。この冊子は各図書館・公民館に常備してありますのでご一読くだされば『しづかな流』と中勘助、さらにいえば平塚についての思いは一入となると思います。つづいて昨年は市民の有志の方々が『しづかな流』を朗読。流れる音声を通して平塚海岸を実感する試みを実施したのです。その集大成として、本年三月十二日午後、中央公民館において、女優の村松英子さんの朗読を中心にして『しづかな流』のイベントを開催することになりました。八十年前に中勘助が播いた種はここに根付いたといつてよいでしょう。多数の市民の方々がお集まりくださり中勘助の感性に触れていただければ幸いです。

### 『しづかな流』の背後にあるもの

さて、『しづかな流』を単に平易な日常生活の記録としてだけ読むことで十分でしょうか。通常、作品を読む場合、その作者の生きざまを知ったほうがより深く読める場合と、そうでない場合があります。中勘助の『しづかな流』の場合、その背後にある中勘助の生きざまを知ることがこの作品を理解するに極めて重要なのです。

母の保養と病児の療養のために平塚に居を構えた中勘助は、なぜ大部の『しづかな流』を書き進んでいったのでしょうか。中家では長男、三男、四男が夭折したので次男である金一（明治四年生まれ）と五男の勘助（明治十八年生まれ）の二人だけの兄弟でした（ほかに妹が一人）。兄金一は大変な秀才で勘助が大学卒業の時はドイツ留学の後福岡医科大学（九州帝大医学部）教授に迎えられたのでした。明治初年の厳しい家父長制の中で、兄の性格的なこともあったのですが、十四歳年下の弟勘助に対しては憎悪に近い接し方を強めます。このことは幼年期を描いた『銀の匙』にも色濃く描かれています。

不幸は突然中家を襲います。文字通り順風満帆の兄金一が脳溢血に倒れます。職も失い、以後狂気のような暴力の中の生活が始まります。若き嫂は介護を一身に負うことになるのです。その精神的な苦痛の中で勘助は絶望的に家出あるいは信州野尻湖を放浪してゆきます。その中で作品『銀の匙』は夏目漱石に絶賛されてとにかく作家の道を歩み始めるのですが、業ともいえる精神の苦悩は癒すすべもありません。一家の負担はすべて勘助に重く重くのしかかり離れることはありません。

不惑。勘助はこうした絶望の中平塚に家を持ったのです。それにしてもあまりにも静かな中での平塚での生活。そのことで逆に私たちは『しづかな流』の背後に潜む底知れぬ深い淵をのぞき見るのです。人間はそうした中、静かに物事を綴ることが出来るものでしょうか。

美しい日本語、と前に記しました。私たちは一見美しい日本文に秘められた思いを感じ取る必要があります。そこに流れる勘助の感性を感じ取ることも必要です。例えば各所に散りばめられた詩編の数々に、そして短歌のかずかず——。

これもまた、平塚での中勘助の姿なのです。だからこそ勘助はことさらに『しづかな流』を静かに静かに自分に向かって書き進めたのではないのでしょうか。

とまれ『しづかな流』を平々凡々のありし日の平塚海岸の一点景として読むのもよし、はたまた勘助の内面に迫って背後を読み通ろうとするのもよし、恐らくはさまざま平塚の中勘助を見ることが出来るでしょう。それが即ち文化なのです。